

●日韓交流のシンボル

「西の正倉院」とは、全く優れたアイデアである。奈良の正倉院を原寸大に再現、二つ目の正倉院を建設するというのは、普通ではなかなか思いつくものではない。そこに、伝説に基づく「百済の里づくり」に寄せる南郷村の熱い思いが凝縮されている。

百済王族の禎嘉王を祭る同村の神門神社には三十三面の銅鏡が伝わる。一九八六(昭和六十二年)、このうちの一つである「唐花六花鏡」が奈良・正倉院の収蔵品と同じ型と判明。これらの宝物を展示する場として「西の正倉院」建設計画が浮上した。まさに「小さな村の大きな挑戦」の始まりだった。

場所は村の中心・神門神社に隣接。樹齢四百年以上の木曾ヒノキ二千本を使用した総ヒノキ造り。高さ十三メートル、幅三十六メートル、奥行き十メートルで、延べ床面積三百八平方メートル。くぎを使わない校倉

(あぜくら)造りで、太さ四十センチの束(つか)柱で支える高床式建築。オープンな九六(平成八年四月)だった。

内部は正面から見ても、右から北倉、中倉、南倉に分かれる。北倉は神門神社の銅鏡などの宝物、中倉が建設で使った道具や資材などを展示。南倉ではパネルやDVDを使って百済王伝説などを伝えている。開館後も、多くの宝物が神門神社から発見され、九九(同十一年)年に展示リニューアル。中世から近世にかけて奉納された数百年の銚(ほこ)は信仰の古さを物語り、展示の仕方も神社の風格を感じさせる。

「西の正倉院」建設の基になったのが百済王伝説。それを今に伝えるのが、旧暦十二月十八日から二十日までの三日間行われる師走祭り(現在はこれに近い金・土・日曜日に実施)。この祭りは、百済から逃れた父王(禎嘉王)と王子

(福智王)がそれぞれ日向市金ケ浜と高鍋町蚊口浦に漂着、父王が南郷村、王子が木城町に祭られたという伝説にちなんで現在も連綿と続いている。

村では百済の里づくりに取り組んで以来、百済の里の本場・韓国・扶餘(フヨ)邑から女性を国際交流員として招き、村民へのハンダ語講座を開くなど積極的に日韓の文化交流を図っている。

そのシンボルともなり、ハード・ソフトの両面から韓国との交流事業を推進していく軸になったのが「西の正倉院」である。それは現在の村人の中に古代ロマンとしてでなく、「今を生きる文化」として生き続けている。

永松 敦



総ヒノキ造り。百済王伝説が息づき、歴史の重みが漂う